今井館ニュース
Imaikan News
第 59 号

2024 年 7 月 31 日発行

三世代に受け継がれる無教会信仰

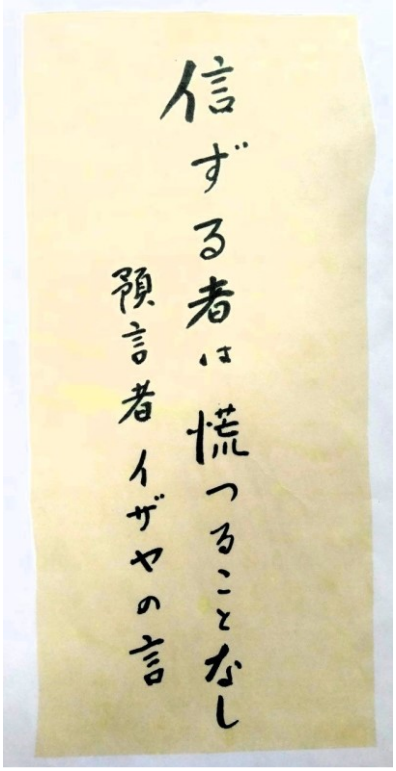
土屋 真穂

私の祖父母は無教会キリスト信徒であった。それは私の両親に受け継がれ、私も無教会の枝に繋がっており、三世代に渡って無教会の流れを汲んでいる。内村鑑三が、自ら信じて信者となったのではなくして、神に信ぜしめられて信者となったと述べたように、自らの意思を超えた神様の働きかけによって信仰が始まった家庭であった。

母方の祖父である石原正一（1917～2010、清水集会）は、信仰に入る前、キリスト教に対して嫌悪を抱き、実父が持っていた聖書を見つけて焼いたこともある人間だった。第二次世界大戦中、戦地において同郷の望月氏が持っていた『嘉信』を読み、戦後に入信し、戦争は罪であり自分自身も罪人の頭であると生涯繰り返して言っていた。自ら集会を興し、10 名ほどで毎週日曜集会を持っていた（現在は西澤正文氏に引き継がれる）。孫である私達には、子どもにも分かるように聖書の話を聞かせてくれたり、聖書の紙芝居を読み聞かせてくれたり、誕生日になると毎年必ず、聖句を１つ選んでカードに書いて送ってくれた。ヨハネの一節から「（キリストの）愛のうちにいなさい」と、ことあるごとに話す祖父。若い世代の私の悩みや置かれた状況にも理解を示し、親身に相談に乗ってくれる柔軟な思考を持つ祖父であった。そして、いつも静かに見守ってくれている祖母・美千代の姿を今も同時に思い出す。

父方の祖母、土屋百合子（1928～2018、東京集会）は、義兄の叔父に当たる井上伊之助先生が台湾伝道から帰国し、百合子の自宅で暫し滞在した際、聖書や台湾伝道に関する多くの話を聞いたことをきっかけにキリスト教に関心を持った。そして、紹介された政池仁先生の集会に通い始め、信仰を持つようになった。越生で行われた聖書集会の帰りの電車では、霊に満たされて賛美歌を歌いながら帰路についたという。祖父孝一は、持ち前の素直さもあり、結婚を機に信仰をもち、二人はいつも一緒に聖書を読み、祈っていた。

そして私の両親となる聡とめぐみは独立学園高等学校で出会い、結婚し、私が生まれた。祖父母の時代から約 100 年。聖書のみことばと内村鑑三の教えが、今も受け継がれている。家族の中で代々形成され醸成され存在する無教会信仰は、祈り、隣人への思いやり、平和の希求、清貧であるように感じる。これは、家訓や律法のように作られたのではなく、日々の慣習の中に存在するものであった。いつも聖書を読み、祈り、家族や集会員をはじめ周りの人に心を配りながら、慎ましく、平和を求めて生きていた両祖父母や両親から受け継がれているものだろう。



石原正一さん 90 歳の揮毫

詳細は知らないが、集会員の一人が亡くなった時に言った祖父の言葉が忘れられない。「愛が足りなかった」。たった一言、祖父は言ったという。「天国は私たちの間にある」と聖書が述べるように、互いの違いを乗り越えて支え合い励まし合うこと、キリストの愛の内にいることをキリストは望んでいる。祖父母達から受け継いだ信仰を元に、愛をもっていきたいと願う。

「互いに忍び合い、責めるべきことがあっても赦し合いなさい〔…〕愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです」（コロサイ 3:13–14）。

（つちや まほ　桜台家庭集会）

目　　次

表紙・巻頭言

目次・内村鑑三の言葉

表紙について・発行趣旨……....2

第 58 回内村鑑三研究セミナー報告……3

斎藤顕さんの思い出……...5

加納貞彦さんの思い出……...6

無教会画家石河光哉の写真……...7

学校・学寮だより……8

第 58 回無教会全国集会のお知らせ・
各地からの報告……...11

定期集会・特別集会のお知らせ……..…..12

事務局便り……....15

維持会員募集のお知らせ・編集後記……16

内村鑑三の言葉

「懐疑」

基督信者に懐疑なるものがある（略）懐疑は幽暗に光明を求むる赤児の声である、現世に神の存在の実証を探ぐる信者の叫号である。

選者注：『聖書之研究』52 号（1904 年 5 月）、『内村鑑三全集』12 巻、196 頁。ダンテ『神曲』の「地獄篇」は、「われ正路を失ひ、人生の羇旅半にあたりてとある暗き林のなかにありき」（山川丙三郎訳）とはじまる。人は、人生の旅路において、旧約のごとき懐疑の森深くに迷い、一人佇む。内村は、『求安録』の最後に、こう記した。「然らば我は何なるか、夜暗くして泣く赤児、光ほしさに泣く赤児、泣くよりほかに言語なし」と。「懐疑」とは、罪であり、その叫びは「救済」とともにある。

（選：NPO 法人今井館教友会監事　小林孝吉）

○表紙について

本号の巻頭言は、無教会キリスト教三代目に当たる土屋真穂さんが、祖父母の代から 100 年受け継がれて来た家族の信仰についてお書きくださった。祖父の石原正一さんは、15 年戦争に徴兵され、生還されたが、政府による軍人恩給の受給を辞退した人であることも、私たちの間では知られている。石原さんの揮毫は、胃癌で余命宣告を受けられたときにお書きになり、居間に貼っておられたものだそうだ。その複製を、今、土屋さんが、ご自分の部屋に飾っている。　(C.Y.)

『今井館ニュース』発行趣旨

NPO 法人今井館教友会は、キリスト教の精神に基づいて、今井館を維持・管理・運営し、内村鑑三（無教会の提唱者）及び彼につらなる者たちの広範かつ多面的な思想と活動を自ら調査・研究するとともに、他の個人と団体による調査・研究をも奨励・支援し、それら自他の調査・研究成果の社会一般への普及に努めて、正義と隣人愛を基調とする平和的な社会の形成と発展に寄与することを目的とする（定款第 3 条）。その目的を達成するため、特定非営利活動に係る事業として今井館ニュース発行を通じ「内村鑑三及び彼に連なる人々の思想と活動を調査・研究・発表する事業」を行うものとする（定款第 5 条 3 項）。